

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都府中市本町2丁目 35-4
園名	アスク府中本町保育園

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

音 ～自然物による「振る」「こする」「たたく」等の音遊びから自分の楽器を木で作る～

〈テーマの設定理由〉

日頃から手が触れられるところに楽器を置き、楽器を鳴らして音楽活動を楽しんでいることと、積極的に木育活動も取り入れていることから、自然物による「振る」「こする」「たたく」等の音遊びを楽しみながら、楽器の構造を探り自分の楽器を作ることで探究心や意欲を育てたいため。

2. 活動スケジュール

6月から1月まで行い、月に1度音楽の専門講師を招き、楽器に触れたり、演奏したりする機会を創出した。この専門的な指導を活動の契機とし、日常的な活動で音探しや手作り楽器に触れるなど担任主導のもとで探究活動を展開した。

初めの導入で音について考える時間を作ることで、楽器を作って音を自ら作り出す活動にまで発展していくようにした。子どもたちの興味関心を基に問いかけや内容を考え、次回の内容を柔軟に変えながらより興味関心を深めていくことが出来るようにした。

6～7月:園内や公園での音探し。どんな音があるかを見つけていく。

8～9月:素材ごとの音の違いを見つける。様々な素材を使って音を出し、その違いごとにグループ分けを行う。

3. 活動の為に準備した素材や道具、環境の設定

- ・ままごと道具やオセロ、ブロック、椅子等室内にある玩具や道具⇒園内の物で音を見つけるために使用
- ・保育で使用している道具、玩具、製作素材⇒音の種類分けに使用
- ・鈴・カスタネット・木琴・トライアングル・ウッドブロック・マラカス・ミニギター・ウッドギロ・スチールタンドラム・ソリッドドラム・おとたま・アウリストロムメール・オカリナ・アンタラ・ツリーチャイム・ビブラスラップ・リングチャイム・パフォーマンズドラム・カリンバ・カチカチ⇒いろいろな楽器に触れて音を出すことに使用
- ・廃材(プリンカップ・ペットボトル・箱・すとりー・ビーズ・ひも・段ボール)と必要な用具(ガムテープ・セロハンテープ・ビニールテープ・両面テープ・ハサミ・タコ糸等)⇒楽器の構造を考え研究することに使用
- ・木材・枝・木くず・紙やすり・布切れ・ブルーシート・鈴・釘・ボンド⇒楽器作りに使用

4.探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える：

子どもたちが音の正体や響き方に注目できるよう、「何が聞こえるかな」「どんなふうに聞こえたかな」といった問いかけを軸に、保育者や音楽講師と共に音探しを行った。

楽器作りにおいては、素材や構造、動きに着目できるよう「どうしたら音が鳴るかな」「どんな形？」などという問いに加え、「あたたかい音」「つめたい音」といった感性を言語化するアプローチを取り入れ、思考を深められるよう促した。また、廃材を利用した楽器作りを通じ、本物の楽器の形や構造を知る機会を設けた。

最後に「手作り楽器との違いはあったかな」「友だちの楽器の素敵なおところはどこかな」と振り返りを行う問いかけを行った。

探究活動の様子：

導入期には、保育室内で目を閉じて耳を澄ませることで「ぱらぱら」「どーん」といった擬音語での表現から、次第に「電車の音」「友達の声」など具体的なイメージへと変わり、「がたんごとん」「きゃー」など実際の音や想像の音を重ねて楽しんでいった。場所を移動すると「葉っぱの声」など表現も広がり、場所による音の変化や、身近な物を叩く・振る・こするといった動作の違いによる音の変化に気づく姿も見られた。

楽器づくりでは、自ら材料を選び、保育者や音楽講師に意図を伝えながら自分なりの形を追求していた。完成後は、音の特徴に応じた仲間分けを行うなど、他者の音との違いを楽しみながら、自信を持って音楽講師の伴奏に合わせて楽しく演奏に取り組んでいた。

ふりかえり(保育士の気づき)：

子どもたちが音に向き合い、自分なりに感じたことを表現しようとする姿を大切に、活動を行った。耳を澄ませる経験を重ねる中で、子どもたちの使う言葉が変化したり、身振りが加わったりする様子が見受けられ、感じた音を伝えようとする確かな成長を感じられた。こうした表現を一つひとつ丁寧に受け止めるよう努めた。

楽器に触れる場面では、単に叩くだけでなく「こする」「振る」といった多様な鳴らし方をさりげなく提示することで、音の違いに自ら気づけるよう配慮した。また、友だちの姿が自然と目に入る環境を整えたことで、真似をしたり驚いたりしながら互いに学び合う姿が見られ、それらを見守るようにした。同じ音でも一人ひとり感じ方が異なることを共有し、それぞれの感性を尊重することを重視した。

楽器や素材については自由に触れられる環境を作り、安全な範囲であれば鳴らし方を限定せず、子どもたちの発見を優先した。楽器づくりの際には、子どもたちの思いを丁寧に聞き取り、「どんな楽器にしたい？」といった対話を重ねることで、自分だけの楽器を作り上げられるよう援助した。難しい工程ではさりげなく手本を示し、理解を深められるよう工夫していった。

子どもたちが安心して新しいことに挑戦し、自信を持って演奏を楽しめるよう、寄り添った声掛けや自由に表現できる雰囲気づくりを大切に。



【4歳児実施分】

問いを考える：

子どもたちが音そのものに気づくだけでなく、「何の音か」「楽器の素材は何か」「どのように操作すればどこが鳴るのか」といった点について、より深く考えられるような問いかけを行った。

既成の楽器に触れる際も、あえて「正解」の鳴らし方は示さず、子どもたちが自分なりに試行錯誤できる環境を整えた。保育者や音楽講師が実際に音を鳴らす姿を見せることで、鳴らし方の違いによる仲間分けに気づく子もあり、言葉だけでなく視覚を通じたアプローチも有効であった。

また、木材を使った楽器づくりにおいては、大きさや厚みなどの形状が異なる素材を多数用意した。これにより、形状の違いが音の変化に繋がることを、子どもたち自身が「なぜだろう」という問いとして受け取れるように工夫した。

探究活動の様子：

園内・園外での音探しから始まり、玩具を使った音遊び、廃材や木材を用いた楽器製作へと展開した。音探しでは、生活音への気付きと共に「静寂」を体験する貴重な機会となった。玩具を用いた活動では、当初は勢いよく音を作ることに没頭していたが、次第に周囲の友だちの活動に興味を持ち、真似や発展、協力へと繋がっていく様子が見られた。

楽器づくりにおいては、子どもたちが自由な発想で製作できるよう、保育者は安全管理に徹しながら、すべての発想を肯定的に受け止めるよう努めた。その結果、打楽器や弦楽器のみならず、擦る音や吹く音を楽しむ独創的な楽器も生まれた。

音が鳴る・鳴らないにかかわらず、完成したものを楽器としてそのまま受け入れたことで、その後の発表会では子どもたちが自信を持って演奏する姿が見られた。それぞれの活動を通じて見つけた音を共有する機会を設けたことが、探究活動の深まりにつながった。

ふりかえり(保育士の気づき)：

子どもたちが自ら音に興味を持ち、探究を深める様子が多く見られた。大人は既成の楽器や手作り楽器を「分類」の視点で捉えがちだが、子どもたちはまず音そのものを純粹に聞き、感じているという大切な気づきがあった。

遊びの中でも、様々なものを叩いて音の違いに気付いたり、叩き方を工夫したりする姿が非常に印象的だった。各自が試行錯誤を重ねて製作した手作り楽器を発表する場面では、自分なりに考え抜いたという自信と達成感に満ち溢れた表情を見せていた。



【5歳児実施分】

問いを考える：

子どもたちが音や楽器に興味を持ち、自ら気づきや発見を深められるよう、問いかけや支援を行った。まず導入として、「部屋にあるものからどんな音がするかな」「いい音を見つけたら教えてね」と声をかけ、身近なものから音を探することを促した。さらに、「どんな音かな」「あたたかい音やつめたい音ってどんな音だろう」と問いかけることで、音の違いや感じ方を言葉で表現できるよう配慮した。楽器に触れる活動では、「どうやったら音が出るかな」「優しく触るとどんな音になるかな」と問いかけ、鳴らし方による音の変化に気づけるようにしました。また、「楽器は何でできているかな」「身近なものでも作れるかな」といった言葉がけから、廃材を使った楽器づくりへの関心に繋がった。完成後は、「自分の楽器はどんな音がするかな」「友だちの楽器の素敵なおところはどこかな」と互いに伝え合う時間を設け、それぞれの音の違いや良さを認め合えるよう進めた。

探究活動の様子：

子どもたちが自作の楽器を自由に演奏できる環境を整えたことで、安心してのびのびと表現する姿が見られた。一人ひとりが自身のイメージした演奏方法を大切にできるよう配慮した結果、自信を持って楽しみながら取り組んでいた。具体的には、楽器を叩く・振るだけでなく、こすって音を出したり、叩く強さや速さを変えたりと、試行錯誤しながら音の違いを楽しむ様子が見られた。様々な曲に合わせてリズムや奏法を変えるなど、固定概念にとらわれず自分なりの表現を見つけていた。また、友だちの楽器に触れたり観察したりする時間を設けたことで、音の違いや材料、形の工夫に気づく姿も見られた。「この音がいいね」「ここが面白いね」と声を掛け合い、互いの工夫や努力を認め合う経験を通して、自身の取り組みを肯定的に捉えることにつながった。さらに、友だちの表現に刺激を受けて「自分もやってみたい」と新しい奏法に挑戦する場面もあり、子ども同士の関わりが活動の広がりを生んでいた。活動全体を通して、子どもたちが主体的に音や表現の楽しさを味わい、豊かな感性と創造性を育てている様子がうかがえた。

ふりかえり(保育士の気づき)：

子どもたちは園内の多様な音に気づくことができた。各クラスでの発表の場では、他クラスの発見に共感したり、自身の経験と結びつけて話したりする姿が見られた。また、身近なものを使って音やリズムを楽しむ中で、日常会話でも音に関する話題が増え、子どもたちの興味関心の広がりを感じる。指導にあたっては、音楽講師と相談しながら最初から使い方を提示するのではなく、実際に触れながら子ども自身が気づきを得られるよう配慮した。その結果、主体的に関わる様子が見られた。廃材を使った楽器づくりでは、十分な材料を準備したことで意欲的に取り組み、演奏会を通じて達成感を味わうことができたようだ。また、活動の様子は園内で共有し、保護者の皆様にも子どもたちの成長や取り組みをお伝えする良い機会となった。



とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	東京都府中市本町2丁目 35-4
園名	アスク府中本町保育園

1. 活動のテーマ

〈テーマ〉

ことばと動き

～「子どもが伸びる幼児期から身につけたい36の動き」の言葉から動きを連想し、表現したり、その動きの入ったゲームをしたりすることを楽しむ～

〈テーマの設定理由〉

体を動かして遊ぶことが大好きな子どもたちが、「あるく」「はしる」「とぶ」などの言葉から動きを連想し、動きを表現したり、動きの入ったゲームをしたりすることで、身体を動かす楽しさを感じながら、様々な動きに興味を持てるようにしたいため。

2. 活動スケジュール

6月から1月まで行い、月に1度体操の専門講師を招き、基本的な身体の使い方など専門的なアドバイスを契機とし、日常的な活動で言葉から動きを連想し、身体を動かす活動を行った。

導入の時間に「動きを表す言葉」を聞いて考える時間を設け、子どもたちが自ら体の使い方を意識し、その動きを取り入れた遊びを考案して楽しめるようにした。

また、子どもたちの興味関心に基づいた問いかけや活動内容をその都度検討し、柔軟にプログラムを調整し、より深い関心を引き出すことが出来るようにした。

6月⇒「あるく」 7月⇒「あるく」発展 8月⇒「跳ぶ」と「飛ぶ」 9月⇒「たつ・すわる」

10月⇒「はしる」 11月⇒「なげる」 12月⇒「わたる」

1月⇒今までの動きを取り入れてサーキットを作る

3. 活動の為に準備した素材や道具、環境の設定

- ・フープ、台、跳び箱⇒「飛ぶ」と「跳ぶ」の違いを考えることに使用
- ・様々なサイズのボール⇒「なげる」の動きを考えることに使用
- ・木製の平均台⇒「わたる」の動きを考えることに使用
- ・デッサン人形⇒各動きを行う時の体の動きを表現することに使用
- ・ロープ、足形マット、椅子⇒サーキットで使用
- ・ホワイトボード、画用紙、ペン⇒子どもたちの考えを可視化することに使用

4.探究活動の実践

【3歳児実施分】

問いを考える：

子どもたちが自身の体の動きに関心を持ち、実体験と結び付けて考えられるよう、体操講師と相談しながらアプローチを行った。

具体的には、「どのような動きか」「他にどのような方法があるか」「どのような場面で活用できるか」「体のどの部位を使っているか」「動いた後に体にどのような変化があるか」といった、動きの意味や体の使い方を意識させる問いかけを行った。

また、子どもたち同士で話し合いながら確認する場を設け、実際に体を動かして視覚的に認識させることで、より理解を深められるよう促した。

探究活動の様子：

子どもたちは、「あるく・とぶ・すわる・たつ・はしる・わたる」といった身近な動きについて、保育者や体操講師の問いかけをきっかけに、実際に体を動かしながら理解を深めていた。

「あるく」の活動では、「あるくってなんだっけ？」という声かけに対し、自ら立ち上がって歩き出したり、忍者歩きやカニ歩きなど様々な歩き方を次々に提案したりする姿が見られた。また、鬼ごっこを通じて、歩き方の違いを意識して楽しんでいた。

「とぶ」については、言葉だけではイメージしにくい場面もあったが、わらべうたやフープ、台を活用する中で、両足跳びや片足跳びなど多様な方法を試していた。また、「すわる」「たつ」の動きでは、正座や三角座りを実践しながら、「体が曲がる・伸びる」といった視点で自分たちなりに違いを考えていた。

さらに「はしる」活動では、足だけでなく腕や体全体を使っていることに気づき、確かめるように動いていた。「なげる」動きを伴うボール遊びでも、手の形を工夫しながら試行錯誤する姿があった。

「わたる」活動においては、自分なりの渡り方に名前を付けて楽しむ姿が見られた。デッサン人形を用いた活動でも、友だちと相談しながら体の動きを表現し、発表し合うことが出来ていた。

全体を通して、子どもたちは言葉による理解に留まらず、実際に体を動かし、友だちと関わりながら試行錯誤を繰り返すことで、体験を通じた気づきや学びを豊かに深めていた。

ふりかえり(保育士の気づき)：

子どもたちが日常的に行っている「歩く・跳ぶ・座る・立つ・走る・渡る」といった基本動作について、その意味や違いを意識できるよう活動を実施した。

「歩く」については前回の経験を振り返り、他児の意見も取り入れることで、多様な歩き方があることに目を向けられるよう促した。また、言葉や図だけでは理解しにくい場面では、用具の使用や体操講師の実演を通じて、身体を動かしながら考えられるよう工夫していった。

走り方、ボール遊びの際も、友だちの動きを観察・比較する中で違いに気づき、自分の言葉で表現できるようサポートした。一人ひとりの「やってみよう」という意欲を尊重し、時には年上児の姿をお手本にできる環境を取り入れたりし、実体験を通じた学びが広がるよう意識して取り組んだ。



【4歳児実施分】

問いを考える：

今回の活動では「幼児期に身に付けたい 36 の動き」を軸に、「あるく」「すわる」「はしる」「とぶ」「なげる」「わたる」といった基本的な動作について、問いかけを中心としたアプローチを行った。具体的には、子どもたちが知っている動きについて実際に身体を動かして再現することから始め、「体のどこを使っているか」という問いを投げかけることで、自身の体の部位に注目し探究を深められるよう配慮した。

「はしる」活動では、活動後、多くの子どもから「つかれた」という感想が出たため、体のどの部分が疲れたかを問いかけた。その結果、「足」や「うで」だけでなく、「胸(ドキドキする)」といった具体的な意見があがった。「なげる」活動では、投げる距離による動きの違いや、「なげる」と「わたす」の違いについて問いかけを行い、動作の特性を考えた。

サーキットづくりでは、全員で協力してサーキットを作成した。構成のどの部分にどの動きが含まれているかを問いかけ、内容を紙に書いて掲示したところ、それがルールの役割を果たし、繰り返し楽しむ姿が見られた。

探究活動の様子：

子どもたちが実際に体を動かしながら、オリジナルの「あるく」「はしる」「すわる」といった動作を考案し、発表する機会を設けた。子どもたちからは「ロボット歩き」や「逆さお手々歩き」、「クマ小屋すわり」など、ユニークな動きが次々と提案された。保育者や体操講師が体の部位の名前を教えると、その曲がり方や動き方に注目し、熱心に探究する姿が見られた。

「はしる」活動では、速く走るための手足の動きを自ら考え、実践した。活動を重ねる中で「腿」や「ふくらはぎ」、「手首」といった部位の名称を自然に使いこなせるようになっていった。

「なげる」活動では、公園でボール投げを行った。前に投げるだけでなく、上に投げる楽しさにも気づき、より高く投げるために屈んで準備をしたり、腕を大きく振り上げたりと試行錯誤していた。また、友だち同士で効果的な方法を教え合う場面も見られた。

「わたる」をテーマにした活動では、「横断歩道」や「踏切」から「海をわたる」といった自由な発想が広がった。サーキットに段ボールやロープを取り入れ、船で海を渡るイメージを持ちながら、ロープを使って進む方法を自分たちで考えて実践していた。

デッサン人形を使った活動では、友だちのストップモーションを参考に人形にポーズをつけ、それを自分たちで模倣した。グループで同じ動きをすることを通して、体の使い方を楽しみながら学べる貴重な機会となった。

ふりかえり(保育士の気づき)：

体を動かす探究活動では、イメージ通りに体を動かす難しさやもどかしさ、そして楽しさを実感する姿が見られた。偶然の発見を友だちや保育者、体操講師に共有することで自信を深め、それが周囲への刺激となって活動がさらに活発化する場面も多く見られた。

普段から知的好奇心が旺盛な 4 歳児クラスの子どもたちですが、この活動を通じて動きの名称だけでなく、体の部位そのものにも興味を持ち、名前を覚える良い機会となった。



【5歳児実施分】

問いを考える：

子どもたちが自身の体の動きに興味を持ち、経験と結びつけながら考えられるよう、様々な問いかけを体操講師と相談しながら行った。

まず導入として、「歩くとは何か」「どの部分を使っているか」を問いかけ、身近な動きを意識させました。また、過去の動きを振り返りながら新しい動きを考える機会を設け、「跳ぶ」という動作においても種類や違いに気づけるよう促した。

あわせて、「座る」「立つ」といった基本的な体の使い方や、「走る」際の状態の変化、感覚にも意識を向けられるように配慮した。ボールを使った活動では、距離による動きの変化について考察を深めた。

さらに、「わたる」動作の問いかけからサーキット活動へと繋げ、最後にはデッサン人形を用いて体の動きを表現し、実際の動きと照らし合わせながら確認を行った。

探究活動の様子：

「歩く・跳ぶ・座る・立つ・走る」といった基本的な身体の動きをテーマに、実践を通じて理解を深めた。「歩く」の導入では、年齢による違いや自身の経験をもとに活発に意見交換する姿が見られた。その後、早歩きやカニ歩き、赤ちゃん歩きなどを実際に試すことで、動きの多様性や楽しさを実感した様子であった。子どもたち自ら「いもむし歩き」や「ロボット歩き」を考案し、鬼ごっこなどの遊びに取り入れる姿も見られた。

「跳ぶ」活動では、跳び箱や平均台を使い、通常の跳躍と跳び越える動きの違いを考察した。

サーキット活動においては、登ってから跳ぶといった動作を取り入れるなどの工夫が生まれていた。

「座る・立つ」活動では、様々な姿勢を試しながら体の使い方を学び、片足立ちのゲームでは腕の広げ方や姿勢でバランスを取る工夫が見られた。また、「走る」活動やボール投げを通じて、膝や腕の動き、投げ方による体の使い方の変化についても、観察を通じて多くの気づきを得ていたようだ。

最後の振り返りでは、デッサン人形で動きを表現しながら試行錯誤を繰り返し、子どもたちが役割分担をしながら探究的に活動を楽しんでいた。

ふりかえり(保育士の気づき)：

子どもたちが「歩く・跳ぶ・座る・立つ・走る」といった多様な動きを体験し、体の使い方や工夫について自ら気づく様子が見られた。自分なりに動きをイメージして表現する過程で、危険を察知する力や新しい動きを考案する力も育まれていた。

片足立ちやサーキット、ボール遊びにおいては、体の一部に意識を向けながら楽しむだけでなく、友だちの動きを観察して取り入れる姿も印象的だった。広い環境で全身を動かすことで、体の感覚を味わいながら、過度に興奮することなく集中して取り組めており、身体表現や意欲の面で大きな成長がうかがえた。

